

疑いの
口は
都道府



もうっ、最っ低。

なんでまたあの二人は喧嘩しているの。とぼっちりを喰うのは私なのよ。ああもう、鬱陶しい！ ていうかお父さんとはもう当分話さないから。

良子はそのアカウントに気がついたのは、三日前の事だ。今度は社会人の「shiotoran」（しおめたぼ）が「りょこりょん」をフォローしていた。プロフィールを確認すると、どこかの企業の会社員らしい。「かなり前にアカウントを作って放置していたんですが、最近また始めました」というメッセージがタイムラインにあった。そんな人がなぜ良子をフォローするのか気になったが、とりあえずフォローを返しておいた。基本、良子は来るもの拒まず去るもの追わずの考えでツイッターをしている。

そして一昨日の夜から、異変というか、違和感がある。良子がリビングでくつろいでいると、会社から帰った父の利雄がこちらを意味深なまなざしでちらちらとみってくる。そのくせ良子がじろりとにらみ返すと、目をそらす。まったく。理乃は本当にこういうところだけ父親に似たと思う。当分話しないと決めたから、良子は無視してテレビを見続けた。

週末が来て土曜日、久しぶりに家族で夕食を食べに行くことになった。相変わらず陰悪な雰囲気漂っているのだが、前々から焼き肉に行こうと決めていたし、何より良子も理乃も焼き肉は食べたかった。焼き肉を食べている間だけは会話をしてあげようと思った。

父はお酒が入ると普段と比較して良く話すようになる。

「そういえば、理乃はもうすぐ体育祭らしいな。日曜日だったら父さんも行けるんだけどなあ。中学校の体育祭は平日だから。お母さんにいっぱい写真を撮ってきてもらおう」

「そうね。いっぱい撮るわ」

「いいよ。撮らなくても。足遅いし」

「来週だったよね。私も見に行っちゃおうかな」

「お姉ちゃんは来なくていい」

「お。そういえば良子は来月体育祭だろ。日曜日だしカメラでも持っていくか」

「高校生にもなって止めてよ。恥ずかしい。カメラは私……」

ん？ ここでも良子は違和感を感じた。どうして父は私の体育祭が来月だと知っている。ここ一週間はろくすっぽ父とは会話していないし、母にだって体育祭の日程はまだ話していなかったはず。

「が持っていくの」

「じゃあ、父さんは見てるだけでいいな」

「見てるだけでいいよ」

肉が次々と運ばれてくる。だから肉を次々と焼いた。そして次々と食べた。

理乃と母は小食だが、良子と父は思い切り食べる。食べ放題と勘違いしてるんじゃないでしょうねと母が眉をひそめるほどに食べる。久しぶりの焼き肉はおいしかった。

良子は帰りの車の中で、そのアカウントを疑ってブロックした。これで良子の発言は「しおめたぼ」のタイムラインには現れないし、向こうの発言も流れてくることもない。まさか。ひょっとすると。もしかして。だが、本人に尋ねたとしてもきっと認めはしないだろう。言い逃れはいくらでもできる。たまたま経歴の似た人なのかもしれない。別人と装うことだって簡単だ。実際「しおめたぼ」の年齢は三十路となっていた。父は四十を過ぎている。ただアカウントを良く見ると、「秋野利雄」のトシオがIDに含まれているし、父はどこからどうみてもメタボリックなお腹をしていた。

だが、なぜ良子のアカウントを知っているのか、どうやって見つけたのかは謎だった。

翌日もまだ母の倫の機嫌が直らない。とぼっちりで良子はちゃんとやっている部活とバイトについて説教をされた。説教されるべきなのは勉強についてされるべきだと自分でも思った。そしてこれは八つ当たりでしかないと気がついて無性に腹が立った。それもこれも元凶は父の所為だ。隠すなら見つからないように隠してほしい。

良子は寝室で昼寝をしている父に突撃した。

「お母さんの機嫌が悪いと面倒くさいんだから。私にまで八つ当たりされるし。私が責任を持って消してあげるわ。パスワードを教えてよ。そしたら、汚物を見るような目で見るのは止める」

「うっ……」

「おとうさん？ どうしたの」

利雄は迷った。言っても言わなくてももうどっちでも同じような気がしていた。蚊の鳴くような声で言う。なんという羞恥プレイなんだろう。

「……………い、いえーです」

「え？ 何？ 聞こえない」

「えろどうがいえいっ、です」

確かに娘は汚物を見るような目を止めた。その代わりにウジ虫を見るような目つきになった。やっぱ言わなきゃ良かった。利雄は頭を垂れた。まあ、本当にやばいファイルは机の引き出しの中のUSBに保存してあるし、パソコンに残っているのはまだライトな動画で良かったと無理やりそう思うほかなかった。本当にやばいファイルが何なのかは拷問されても良子たちには言えない。それくらいにやばいファイルだった。

そのまた翌日。

父にとっても偉そうにしていた良子であるが、もちろん興味がないわけがない。パスワードを訊きだしたのは純粹に消去しようと思ってのことではあるのだが。

しかし。

良子は盛りのついた高校生である。当然そういったものに好奇心がくすぐられないはずがない。パソコンを起動して「覗き見防止ちゅう」に聞き出したパスワードを入力する。わが父ながら馬鹿じゃないのと思う。すうっとふよふよ漂っていた虫が消えて幾つかのファイルが現れる。ファイルを右クリックして、「削除」の上にカーソルを置いたところで手が止まる。

今日は月曜日である。母の倫はパートで十七時過ぎまで帰って来ない。妹の理乃は遊びに行くと言っていたから、おそらく十八時ごろの帰宅だろう。父の利雄は二十一時まで仕事だろう。今は、十六時だった。良子はテスト期間中で部活もバイトもなかった。良子は誰もいないと分かっているながら背後を確認した。左右も確認した。

「削除」の上に置いたカーソルをゆっくりと一番上に移動させる。「再生」の上で、かちっとクリックする。動画が再生される。知識としては知っていたのだが、生々しい。けれど、怖いもの見たさで最後まで見てしまう。

良子は画面に気をとられていて、背後が疎かになっていた。

はっと、気がついた時には遅かった。人の気配があった。

「ふっ、ふっ、ふっ。みいーっちゃった」

理乃だった。

……っ、っきゃああああと叫び、良子は慌てて電源を長押ししてパソコンを強制終了させた。飛び上がって走って逃げる。またこれで理乃に握られる弱みがひとつ増えた。ことあるごとにアイスおごって—お小遣い頂戴—と脅されるんだろうなと良子は哀しくなった。父の気持ちが少しわかった。と、同時に同じように父を脅せばよいかと開き直す良子でもあった。

その場に残された理乃は軽くため息をついた。

「お姉ちゃんって、猿みたい。私にもあれくらいの運動神経があればいいんだけど」

理乃は普段から音も立てずに家に入る習慣があるわけではない。ただテスト期間中の姉がちゃんと勉強しているかどうかを確かめたかったのである。昨日も母にやれ部活のしすぎだのバイトのしすぎだのと怒られていた。姉は不服そうだったが、理乃には母の怒る気持ちが理解できた。姉は一度自分の成績表を良く見てみれば良いと思う。案の定、テスト前だというのに勉強なんてしていなかった。鍵を開ける音から気をつけて家に入り、そろりそろりと近づいたが、画面に夢中でまったく気がつかない。音楽なしでラジオ体操第二を始めて、三分くらい経過してようやく良子は後ろを振り向いた。

そのときの良子の顔は写メに撮っておきたかったほど、おもしろい顔をしていたと理乃は思う

。

疑いのブロック

<http://p.booklog.jp/book/33110>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33110>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33110>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.